医事・文談　九百六十一　平岸　三八

《正岡子規（36）の続き》その249

子規と漱石（五十八たび続）

またまた漱石とより江さんとの間柄に関する記述を見出した。それは「漱石全集第31巻　書簡集五」に於てである。（一九八〇年普及版）

漱石は恐ろしく多数の手紙を書いた人である。何でも三千に近いとか。全集だけにでも二千有余ある。従って書簡集を通読するなどトンデモナイことである。今回はヒョット覗いたらより江さんの名が出ているので驚いた次第である。

それは全集の「書簡集　五」の一九五〇に出てくるのである。大正四年五月三十一日付、牛込区早稲田南町七漱石から京都市東三本木南町横地敏宛へのものなかにある。

横地　敏とは注解によると、漱石の松山中学時代の同僚、横地石太郎の娘さんだそうである。

その手紙のなかに、次のようにある。

「松山で私の下宿してゐた所にゐた頼江さんといふ人は、今福岡大学の久保猪之吉という博士の妻君になってゐます。東京へくると屹度寄ってくれます。」

東京へ来ると屹度寄ってくれるというのであるから、かなり親密な交際をしていることが分る。

写真や物のやりとり、著書の贈呈などは、単なるつきあいではない。

ところで、又々より江さんの資料を見つけた。店頭の書物あさりは、小生の日課である。今回の発見は、秦　郁彦著『漱石文学のモデルたち』（二〇〇四年十二月十日　講談社発行）である。漱石の作品のうち、「坊っちゃん」「猫」「三四郎」中の人物のモデルさがしで、なかなか興味津々たる読物である。

秦氏は文学者ではない。東大法学部を卒業、大蔵省に入り、財政史室長で退任、プリンストン大学客員教授、国内でもいくつかの大学教授を歴任した歴史学者である。

しかし、専門書のほかに、このような書だとかの如き極めて面白い本も出版されている。各校ごとの校風の違い、創設時の事情、入学・卒業人数、入試合格難易度、軍事教練や左翼運動をめぐる事件、変った卒業生等々について詳細に調べたもので、我が北大予科についてもページが割かれている。

『旧制高校物語』（文春新書、平成15年12月発行）

漱石の「吾輩は猫である」のなかの、雪江という、主人公の姪が、より江さんをモデルにしているのだそうである。尤も女学生となっている。

「猫」の十の部に、主人の勤める文明中学の二年で、頭の大きい古井武右衛門が「退学になるでしょうか」と、それを心配して担任である苦沙弥先生のところに相談に来る。その大頭と主人との珍妙な問答を聞いて、雪江さんは細君と笑いこけるところがある。

雪江は十七、八の女学生で、踵のまがった靴を履き、紫色の袴を引きずり、髪を算盤珠のようにふくらましているとある。自転車に乗ってくるとは書いていない。

武右衛門が何をしたかというと、友人と三人で共謀して、主人の近くの金田の娘が、ハイカラで生意気だからと、艶書を送りつけたのが露見したら退学になるのではとの心配である。艶書は古くは、つけぶみ、今ならラブレターである。

その文を書いたのと、金田家の郵便受けに投函したのはそれぞれ別な友人で、武右衛門はただ名前を貸しただけなのである。しかも武右衛門は金田富子の顔も見たことがないという。

「猫」の面白さは、全編にみなぎっている。もう一度読み返してごらんになるといい。

秦の著の人名索引により江については、次の如くに書かれている。

宮本正良の長女、母は上野義方の女、松山高小を経て、東京府立第二高女中退、明36・5久保猪之吉と結婚、昭16・5・11死。

猪之吉は昭和十年、定年後東京に移り住み、4年後に死去。その前年からより江は中風を患っていて、子供がいないかわりに可愛がっていた猫が仏壇の灯明を倒し自宅は全焼の不幸に会った。

表紙写真

タズマン氷河

札幌市医師会　千秋　亨

ニュージーランド南島には、3,000mを超える18のピークをもつサザン・アルプス山脈があり、最高峰マウント・クック山（標高3,754m）から流れる6筋の氷河のうち、タズマン氷河へ、スキーを装着したセスナ機で着陸した。好天にも恵まれ、青・赤・黄・黒・白のコントラストが美しく映えた一風景。

2004年5月撮影